関西学院における社会学の歩み（その1）.
——明治・大正時代——

倉田　和四生

はじめに
〔1〕黎明期の社会学
〔2〕小山東助教授と社会学科の開設
〔3〕河上丈太郎教授と社会学科
〔4〕高田保馬博士の講義
〔5〕新明正道教授と社会学
むすび

はじめに

関西学院は1年後に100周年を迎える。そこで100周年史の企画も進められているが，この際，それぞれの部署においても歴史をまとめておくことが望ましい。しかしそのこととは別に，かねて関西学院における「社会学の歩み」について書きまとめておきたいと考え，前に社会学部の始業講演で話したことをもとに少しまとめ始めていたが，雑事にとりまぎれ途中で放置していた。ところが昨年（62年）の1月11日に恩師の大道安次郎先生が急逝されたので追悼の意味をこめて，「大道安次郎博士の人と業績」を本誌（55号）に寄稿した。大道先生は大正12年に関西学院高等商業学部に入学されているから，それ以降のことを書き綴ったことになる。したがって私が最初に企図していた執筆の順序を逆にして，まず大正末年ごろから大道先生を中心にしたものを先にまとめて発表することに成った。

しかしながら関西学院の社会学科は大正4年に開設されており，さらに明治時代にも社会学の講義がなされていた形跡がある。そこでここに関西学院における社会学の黎明期から始めて，社会学科の開設，河上丈太郎先生の働き，高田保馬先生の講義，新明正道教授にいたるまでの明治・大正時代の社会学の歩みをたどってみたい。したがって本稿と前稿「大道安次郎博士の人と業績」を継なぐことによって，関西学院の黎明期から昭和47年までの社会学の歩みをたどることが可能になる。

〔1〕黎明期の社会学

（1）高等学部の誕生

関西学院は明治22年，神学部と普通学部をもって出発したが，高等学部を併設する計画は草創の頃より考えられていたもので，いろいろな形でその試みがされた。まず明治27年，普通学部5年の上に2年の高等普通科が設けられた。翌28年には普通学部普通科4年と普通学部高等科4年としたがこれは時期尚早で自然消滅した。次いで明治32年には予科1年本科4年の普通科の上に3年の高等科として英語科を設けたがこれも自然に解消した。さらに明治37年には普通学部高等部が設けられたがやがて廃止された。このような執拗な努力にもかかわらずこれが根づかなかったのは専門学校としての認可を受けていなかったからであるといわれている[1]。

ところが明治41年に神学部が専門学校の認可を受け私立関西学院神学校となったのでこの問題も解決した。さらに明治43年からカナダメソジスト教会が経営に加わり，高等部計画も前進することに成る。明治44年12月に高等学部併置計画が発表され，翌45年（1912）には私立関西学院と改称した。そして専門部に神学部と高等学部を置き，高等学部には文科と商科が設けられ，修業年限は4年と定められた[2]。

さらに大正4年（1915）には文科に英文学科，哲学科，社会学科の三学科が設けられた。そして大正10年（1921）には遂に文科が文学部に，商科

1）『関西学院50年史』昭和15年，75～82頁
2）　同上書　111頁～134頁

が高等商業学部にそれぞれ独立した。

（2）黎明期の社会学——T. H. ヘーデン教授

今日の社会学部の濫觴は正しく大正4年，高等学部文科に設けられた社会学科であるから，関西学院における社会学の講義はこの社会学科とともに始まったものと考えられていた。これまでの研究にも社会学科開設以前の社会学の講義についてはあまりふれられていない[1]。

しかしいろいろな資料を調べていくうちに社会学の講義は社会学科開設の以前からなされていることが明らかになった。筆者は昭和56年社会学部の始業講演に当って社会学科の歴史について話すことに決め，学科開設当時のことを原資料に当って調べた。その際，たまたま斉藤正二教授の『日本社会学成立史の研究』に目を通している際，その付録に明治30年頃，日本で社会学が講義されていた機関のリストが載っているのが目についた。しかもそのリストの最後に関西学院の名があり，担当者はT. H. ヘーデンとなっているのである[2]。この事実に興味を抱きヘーデン教授なる人物を調べてみた。この人は明治28年（1895）に宣教師として来日し，翌29年に関西学院の神学部に就任し，昭和4年に定年退職されるまで34年間にわたって神学部で教鞭をとられたが，その間に19年間も学部長（代理を含む）を勤めている。また関西学院を引退された後も宣教師として昭和15年まで活躍していたが，同年に宣教師にたいする帰国命令によってやむなくアメリカへ帰国されている。このようにヘーデン先生は関西学院のために大きな働きをなされた方であった[3]。

（3）五つのステップ

黎明期における関西学院の社会学は五つのステップを経て拡充されていると考えられる。まず第一に，関西学院の学則で社会学の科目が最初に見られるのは明治37年4月のもので，普通部高等部の学則にみられる「ギデングス氏 社会学 週2時間」である。次いで明治41年の社会学の担当者がヘーデンとあるから，斉藤正二教授のリストを合せ考えると37年の担当者もヘーデン先生であろうと推定される。この制度のもとに所定の学課を修了したのは2名だけであった[4]。

次に関西学院において最初に専門学校が認可されたのは明治41年の私立関西学院神学校であるが，認可を受けた学則によると，本科第二学年の学科目に「社会学 伝導法 週2時間」とあり，専攻科の随意科目（5科目中2科目選択）の中に社会学が置かれている。そして担当教授として，T. H. ヘーデンとなっており，先生の経歴にはヴァンダビルト大学のバチェラー・オブ・フィロソフィならびにバチェラー・オブ・デビニチィとなっている。ヘーデン先生はヴァンダビルト大学で哲学と神学を修めておられることがわかる[5]。そしてこの先生は後にランドルフ，メーコン大学から神学博士の称号を得ている。

明治37年の普通学部高等部の「社会学」においてキデングスの社会学が使用されていたことが明らかに成ったが，ギデングスはアメリカ社会学の形成期に活躍されたビッグフォー（ウォード，サムナー，スモール，ギデングス）の一人でコロンビア大学に社会学部を創設されたすぐれた社会学者であるが，ヘーデン先生が関西学院に就任された明治29年（1896）に『社会学原理』（The Principles of Sociology）を公刊している。この著書は心理学的な社会学であって，社会の本質を同類意識 Kind of Conciousness と捉え，独自の社会学を展開したもので，すぐれた古典とされている。当時，関西学院では教科書は原書を使用することが多かったが，社会学においてもギデングス

1）河上丈太郎先生の回顧録（『関西学院60年史』249～254頁）にも社会学は高田保馬教授の講義から始まったように書かれている。また余田博通「記念論文集発刊に際して」『関西学院社会学部紀要9・10号』昭和39年11月 や藤原恵「関西学院史に見る新聞教育」『社会学部紀要29号』昭49年7月 にもこのことは論議されていない。

2）斉藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版 1976　240頁

3）関西学院をこよなく愛されたヘーデン夫人は昭和25年関西学院にハモンド・オルガンを寄贈され，中央講堂に置かれて使用されていた。それが後第4別館に移されたが十分に利用されていなかったので，紛争後，社会学部がもらい受け，学部のチャペルに置いて約15年間も使用していた。社会学部は永くヘーデン先生の恩恵を受けていたのである。

4）『関西学院50年史』昭和15年　81頁

5）明治37年に普通学部高等部が設けられた際の「学科課程及教科書配当表」によると第2学年に社会学がみえ教科書はギデングス氏社会学となっている。担当者の記載はないが，おそらくヘーデン先生であろう。

の原書を使用したことが申請書のオリジナルに鉛筆で記入されている。

ヘーデン先生は出版間もないギデングスの『社会学原理』をテキストとして講義されたものと推察される。ところが大正時代に入ると高等学部が開設され，ベーツ先生が部長に就任された。

第三に神学部は明治44年2月，先の学則の変更（本科5年，別科3年）を申請し4月に認可された。それによると同じく本科2年に社会学，専攻科で選択科目に社会学がみられる。

第四に，関西学院は明治45年1月神学部の外に高等学部を設け文科と商科を置く申請を出し，3月に認められ，4月から実施された。これによると文科2年に社会学，3・4年の3類（社会科）に社会学関連科目が多数見られる。また商科でも2年に社会学が置かれている。

第五に，大正4年高等学部文科に英文科，哲学科，社会学科が設けられ，2年以上で本格的に社会学と関連科目が開講されることに成った。大正時代に入ると，ベーツ，アームストロング，アウターブリッジ先生が社会学を担当する。まず大正2年の学科目担当表によるとベーツ先生が社会学を担当されている。また大正4年の担当表にはベーツ先生が社会学を，小山先生が応用社会学を担当している。大正5～9年には高等学部長のアームストロング先生が社会学を担当，大正7年8月にもアームストロング先生が社会学を担当している。大正8年にも同じである。大正9年には再びベーツ先生が社会学を担当し，同じくアームストロング先生も担当している。さらに大正10年にはアウター・ブリッジ先生が社会学を担当している。大正10年2月には再びベーツ先生が社会学を担当している。

これらのことを通観すると，関西学院の社会学は高等学部の文科，文学部が確立する前にまず神学部において育てられていたことが明らかになる。そして担当者は明治時代はヘーデン先生，大正時代にはベーツ先生，アームストロング先生，アウターブリッジ先生等が交替で社会学を担当されているが，これらの先生方に共通していることはいずれもマスター・オブ・アーツの称号を持っておられる点である。

神学部に胚胎した社会学は修士号をもつ練達の宣教師によって教えられていたことがわかる。

〔2〕小山東助教授と社会学科の開設

大正元年（1912年）高等学部が新設され，文科と商科が発足したが，翌大正2年（1913年），小山東助氏が教授に就任し文科長となった。

小山東助氏は宮城県気仙沼町の出身で仙台2高を卒業後，東大の哲学科を卒業後，明治36年（1903），東京毎日新聞に入社し，明治42年（1909）には早稲田大学の講師となっていたが，大正2年（1913）関西学院に招かれ高等学部の文科長に就任したものである。

『文学部回顧』[1] によると「文科長としての小山教授の意気込みは実にはり切ったものであって特にその説教なんかに至ってはいつも腹の底から出ている力強い叫びであり，インスピレーションに富んだもので，いつも話をする時には両手を拱いで，その語調は人をひきつけずにはおかず，若人に絶えず新しいものを与えていた。

理想家であり，思想家であり，文学者でもあれば，哲学者でもある。よき説教者であり，Misticな人であり，政治家としても宗教家としても当代稀に見る大人物であった。文科がこうした人を得たという事は何といっても大いなる強味でなければならなかった。」[2] と書かれている。

しかし前年に発足した高等学部の文科は商科の隆盛に反して人気がなく学生は集まらなかった。『関西学院50年史』によると「一方文科に於ては最近僅かに4名の入学者しかなく，第2回入学者も各5名に過ぎず，しかも彼等は4年に及ばずして或は校門を去り或は神学部に転じ創設後3年を経るも業を了へる者なき有様であった。これは明治時代に試みられた高等科設置計画の不成功と同じく時勢と学院の環境が然らしむる結果であったが，又一つには文科の学科目が当時の我国教育の実際に適せざる嫌があった為であった。」[3]

1）『文学部回顧』は仁川に移転後の昭和5年，文学部の学生団体である文学会が文学部18年の歩みを学生の立場から回顧したもので，数々のエピソードが収められている。
2）関西学院文学会編輯部編『文学部回顧』昭和6年　14頁
3）『関西学院50年史』136頁

そこでこのような状況を打破する為に小山教授によって構想されたのが文科の中に英文科，哲学科，社会学科の三学科を設けるというものであった。これについて商科長として小山教授と協力して改革を実行した木村禎橘教授は60年史の回顧録の中で「小山文科長は郷土陸前気仙沼港（別名鼎浦）の生んだ空前の天才で新聞記者として，教育者として，宗教家として，文学者として，又政治家として到る処で頭角をあらわした人であったから，文科の構想は相当廣汎なものであり，英文学科，哲学科，社会学科の三科とし，英文学科の最上級を純文学部と英語教育（師範）部の二部制を設けるものであった。」[1]と述べている。

その理由について『文学部回顧』には「英文科設置は学院としては当然の事であったが，特に小山氏の主張した事は，ミッションスクールはどうしてもSocial Workerを作るべき使命を持っているという事であって，そのため新聞科，社会事業科といった様なものをおかねばならぬという事を熱心に主張し，社会学科という名称についても，或は法律科，法政科，さては経済科といった案も出て，社会学科という様な名称は漠然としているなどと主張した人が多くあったが，そうした限られたものでなくもっと伸び得る，綜合的社会指導理論把握の為めどうしてもこの名称でなければならないと断然その主張を通してしまったわけである。」[2]と述べている。

このことは吉野作造，内ヶ崎作三郎とならんで海老名彈正門下の三秀才と称された小山東助がクリスチャンとしての確固とした信念をもとに社会学科を創られたことをよく示している。

その後の文科・文学部の発展は正しく小山東助の卓越した識見にもとづいた学科編成に負うところが大きいといわなければならない。

しかしこれ程の信念を持って大きな改革を断行した小山教授はその改革が十分に軌道に乗る前に突如として関学を辞（4年1月28日）して大正4年3月の衆議院選挙に立候補して当選した。

もともと彼は政治家に成ろうとする願望を持っていた。彼の告別の辞によると「而して当時内村鑑三氏の東京独立雑誌や海老名教師等に仍って宗教という新しい世界がわが前に開かれた。此に於て政治家たらんとする心，学者たらんとする心，宗教家たらんとする心，この三つの心が断えず爭斗している。そして大学卒業後は東京毎日新聞社に入りて社説記者として盛んに政論を試み，結婚後不治と云はるる病の故に東海道の海岸に病を養う事三年にして，快癒し早稲田大学の講師として聘せられ，後此の関西学院に招せられたのである。

妻を失ひ（この語を吐かれた時には先生は突然歔欷せられた）毎朝六甲に仰ぐヘルマンと岡本なる本願寺の二楽荘とに現代の宗教政治との権威なき事を思い居たりしに，偶然に数日前同時に横浜にある令弟と友人とより政界に立つ心なきやとの暗示を受けた。私は天レベレーションを受けたのであります。私は今日の日本の政界に偉大なるアイデアルを与えなければ禍ひです」[3]と衆議院選挙の立候補にふみ切ったいきさつが述べられている。

忽然として関西学院を去り衆議院議員に当選した小山氏は次の大正6年の選挙では最高点で連続当選し，憲政会に入会し，7月3日国会に於て寺内首相に対し「言論圧迫ニ関スル質問」を行なうなどの活躍をしたが翌年3月喀血し8年8月永眠した。享年41才であった。

政界雄飛の願望は果したもののわずか数年にして病に倒れたことはまことに残念なことであった。若し先生がそのまま永く関西学院にとどまっておられたならば「文科」がさぞかし飛躍的発展を遂げたであろうと惜まれる。

鼎浦全集（三巻）に収められている著作は「社会進化論」，「文明評論」，「政治評論」，「久遠の基督教」，「光を慕いて」，「宗教評論」などである。

〔3〕河上丈太郎教授と社会学科

（1）最初の社会学科生達

さきに述べたように大正元年（1912）高等学部に文科と商科が設けられ，さらに大正4年から文

1）『関西学院50年史』昭和15年，236頁
2）『文学部回顧』8～9頁
3）　同上書　16頁

科には英文学科，哲学科，社会学科が設けられた。しかし最初の大正４年と次の５年には社会学科に志願者がなく，６年の入学者の中に２名（川田，尾崎）の志願者があったが，学生２名ではどうにもならぬということで社会学科生としての処遇をしないままであったらしく，学生の不満が高まっていった。『文学部回顧』によると「規則書に社会科もチャント明文となって存在が約束されていたので意気込んで入ってくると，あに図らんや入学当時から總勢７名，中村清君，平松金次君，尾崎祇臣君，岡田君，青山湛君，川田啓一君，志賀勝君これもバラバラに散って後に残ったもの僅かに２名，３年の時商科から井上晃君，上田（桝田）純二君が移って来たので４名になったものの，これでは社会学科も出来そうでもない。が仲々川田君やそれに尾崎祇臣君の二人は熱心なもの，人数なんか問題にしていない。『俺は社会科に入ったんだが，その社会科をどうしてくれる?』と村上教授なんかをとらまえてえらい権幕，處が村上教授は又頑固な人だったから『置かうと置くまいと当局の勝手だ』と剣もほろろの挨拶，いやあべこべにひどくどなられて，川口君もスッカリ憤概し，志賀君の仲介でやっとの事その場は納まったという話もある。」[1]と述べている。

河上丈太郎教授は大正７年４月，このような状況の中で関西学院に就任し社会学科担当の唯一人の専任教員としてその面倒をみるようになったわけである。小山教授は偉大な種を播かれたが，すぐその芽が出たわけでなく，数年後ごくわずか出た芽を河上教授が丹精こめて育て上げたというのが実状である。

河上教授は後に学院六十年史に寄せた文章の中でその間の事情を次のように述べている。「川田君，尾崎君は元来規則書にある社会科を希望して入学したのですが，それが出来ぬというので文科の主席教授であられた村上教授に対し，俺達は社会科に入学したのに，その社会学科をどうしてくれるのだと抗議をされました。村上教授もこれには弱られましたが，学院の準備がないので置こうが置くまいが当局の勝手だと，あっさり断わられたといわれています。そこで私は見るに見兼ねて川田・尾崎両君のために Mill の Considerations on Representative Government の講義をしてやりました。それは一は語学力の養成のためであり，他には政治学研究の栞ともなるべしと思い同書を選んだのであります。」[2]

最初の大正４，５，６年の三年間は社会学科専攻生は２名にすぎなかったが，河上丈太郎先生が就任した大正７年から，俄然，社会学科生が急増した。

関西学院50年史には「文学部にあっては学制上，英文学科，社会学科，哲学科の三科が存したが最初の数年は英文学科以外には専攻学生がなかった。しかるに当時漸く抬頭した労働問題をはじめとし各種の社会問題に対して青年学徒の間に強い関心が喚起せられ引いては社会学研究が勃興し大正７年入学の学生の中過半は社会学を専攻することになった。此の傾向は爾後継続し大正11年３月，麻生幹夫，福井宗五郎，兵頭進，川那辺惇一，木村己之吉，鹿谷隼，光村利雄，森田進，大塩彦治郎，武田貞良の10名を最初の社会学科卒業生として出してより後は年々卒業生を世に送った。かくて社会科の基礎は定まり特異の存在として世の注意を惹くようになった。」[3]と記されている。

（２）関西学院への就任の事情

河上教授の献身的な努力はようやく実を結びつつあった。河上教授は関西学院に奉職することになったいきさつについて，「私が関西学院に赴任したのは大正７年４月でありました。同年３月立教大学の卒業生の謝恩会が東京築地の精養軒で開かれた席上で，私と同じく講師をされていた外岡松五郎君が私にこの度神戸関西学院教授として赴任する旨を伝えられ，私にも一緒にゆきませんかとの話がありました。どうしてそんな話があるのですかと尋ねましたら，同君は自分の友人で既に学院の教授として就職を承諾した人があるが，事情により他に就職を致し学院の方はやめたので空席があるから，君さえよければ直ちに決るとの話でした。私は突然の申出であり，速答を控えまし

1）『文学部回顧』33頁
2）河上丈太郎「学院と私」『関西学院六十年史』251頁
3）『関西学院50年史』191頁

た。

元来私は東京に生まれ学校も一高東大と地方に出たことがないし，それまで箱根山を越えたことすらないもの故神戸と聞いてちょっと考えさせられました。然しよく考えると，一度は地方に出るのも自分の修養にもよかろうと思い，意を決して同君の勧誘に応ずることにしました。翌日同君にこの返事を伝え，同君はその夕神戸にたちました。着後直ちに返事をするとのことでありましたが，四月に入っても何らの音沙汰もありませんので，立教大学，明治学院の授業の関係で早く決めてほしかった私は非常に弱っていました。ところが6日頃になって「来い」との電報がありましたので神戸に参りました。」[1]と書いている。

そして高等学部長と会った河上氏は「私は多少傲慢でしたが，私は単にあなたに雇われるのではない，貴方たちが多額の資金を使ってやっているmissionary workをhelpするために来るのだ。この点予め御了解願いたいと随分勝手なことを申しました。アームストロング博士はこの無遠慮な私の申し出を快く受けてくれましたので，私は赴任することに成りました。」[2]とその抱負を述べている。

このように抱負を持って就任された教授にとってまず為すべきことはミッション・スクールの学生に自信をつけさせ，文科を充実させることであった。氏は「私が学院に来ましたときは高等学部として商科と文科が併置されていました。私は商科の教授もしました。文科では一年の——殊に社会学科の学生のために教授をしました。当時は学生——殊に商科の学生の考えが卑屈でありました。隣の神戸高商の学生に対して自信がないのをみて私は驚きました。私は官学の出身者でありますが，私学の意義を高く評価していました。殊にmission schoolの価値を高く評価していました。mission schoolの日本文化に対する意義——基督教の教育の日本社会に於ける価値を強く意識していたものであります。私はいろいろと他に就職の勧誘を受けましたが，これを断り立教大学，明治学院の講師をしていましたのも，こんな理由によるものであります。その私が当時の学生の気分にmission schoolの使命に対する自信が欠けているのに義憤を感じました。私はこの自信のない気風を一変して強き自信をもち，mission schoolに学ぶものの喜悦とその誇を高めたいと願いました。それには学院に文科が併置されている。この文科を大ならしめて学院全体の権威を高めたいと思いました。」[3]と述べている。

（3）社会学科の発展にむけての努力

しかもその具体的方策として社会学科の育成拡大をはかったわけである。すなわち氏は「私は自分の過去の学問的立場よりして文科の社会科を充足することがこの目的に適うものと思い，社会科の完成に全努力を傾倒しました」[4]と述べている。

河上教授が最初に手がけたことは増加した学科生に専門の社会学者の「社会学」の講義を聞かせることであった。そこで，当時，『社会学原理』を出版し，広島高等師範学校に就任したばかりの高田保馬教授にお願いして，集中講義をしてもらった。これが大正8年と9年の二ケ年間にわたって続けられた。これによって学生達の社会学への「乾き」は，一応、癒され，学生達の不満も治まった。このことを考えると実質的には大正8年の高田博士の講義とともに関学社会学科が動きだしたといえるであろう。さらに河上教授はこの好機を捉えて，神戸市青年会館において高田-河上両氏の公開講演会を催している。

次に大正10年には東大新人会のメンバーであった新明正道教授を迎えて政治学と社会学の担当を依頼した。さらに11年には松沢兼人先生が就任し，社会政策を担当することに成った。このようにして社会学科担当の教員が三名になり名実ともに充実したものとなった。すなわち法律学，政治学，社会学，社会政策の担当者が揃ったわけで，この頃，ようやく教授陣容が整い社会学科らしいものに成長した。

このように社会学科の整備充実はすべて河上教授の識見と努力によったものである。河上教授は

1）河上丈太郎「学院と私」『関西学院60年史』249—250頁
2）　同上書　250頁
3）　〃　250-251頁
4）　〃　251頁

法律専攻であったから法学通論，憲法總論，刑法，犯罪学，法理学，法学史，民法，国際法などを講じ，週20教時間も教えるとともに「学生監」も勤め，学生一人一人に魂を吹き込むという最も重要な教育の働きをなさった先生であった[1]。

河上先生こそ濫觴期の社会学科の育ての親だと云えよう。教授は30代の10年間を関西学院に献げた後，昭和２年に関学を辞職して弁護士となり，昭和３年には，日本初の普選法の実施に際して日本労農党より推されて代議士となり，後には日本社会党の委員長となって活躍された。十字架委員長と呼ばれたことはよく知られている[2]。

〔４〕高田保馬博士の講義

河上丈太郎教授は30代の若い情熱を社会学科の育成に傾注したが，自からは法学関係を担当した。大正７年に多数の社会学科生が入学したので翌８年，彼等が２年生に成ると社会学の講義が必要となる。さきに述べたように当時のカリキュラム上は宣教師が担当することに成っていたが，学科の中心科目として社会学を担当する日本人の教師が要請されるようになった。

その間の事情を『文学部回顧』には「『吾れこそ社会学科の学生で御座い』とおさまってしまひ，さて河上教授一人だけで社会科の陣容ととのはぬのが不平でたまらぬ。羊頭をかかげて狗肉を売るとはこの事だ！いい社会学の先生を呼べ，ストライキだ。總退学だ！と騒ぎ立てたから学校も辛らい。

騒いだ結果は空しからず。当局はにはかにあわてゝいい人もがなと物色し，当時廣島高師に居られた高田保馬教授が来られるという段取りになり，河上教授が『社会科は学生諸君自身で作り上げたようなもの』と述懐せられるのも尤もなわけ。小山氏の植えておいた種からやうやく芽がふき出かけたという形である。これでやっと第一期第二期の社会科連中も納得して落ち着く事とはなった。」[3]と記されている。

河上丈太郎先生も「大正８年になり当時の一年の社会科の学生が上級に進むに及んで私だけでは手薄になりました。学生もこれを察知して学院に対し社会学の専門の教授を呼ぶことを要求して参りました。その結果，当時廣島高師の教授であった高田保馬氏を招いて社会学の講義をして貰いました。氏は広島よりわざわざ来られその日頃の蘊蓄を傾けられ，学生の不満も同氏の学問的努力によりおさまりました。社会科第一期第二期の学生はこれで落着きました。」[4]とほゞ同じ事を述べている。

大正７年，８年と社会学科の学生が急増したにもかかわらず日本人の社会学専攻の教授が居ないという社会学科の危機的状況を救っていただいたのが京大を出て廣島高師に就任されたばかりの高田保馬教授であった。

高田先生は京都大学を卒業後も大学院に残られ米田庄太郎博士のもとで社会学の研鑽を積まれ，大正８年『社会学原理』を公刊するとともに廣島高師の教授に就任された。この『社会学原理』は明治初年以来，欧米の社会学を輸入し祖述することに努めて来た日本の社会学研究のなかから日本人によって真に本格的，体系的な社会学が発表された最初の記念碑的な意味をもつ著書とされている。

1）山本利寿他「座談会 師として友としての河上教授」『河上丈太郎 十字架委員長の人と生涯』68頁

2）本稿をほゞ書き終えた頃，河上民雄先生にお会いしたところ，下記の資料を寄贈していただいた。これらの資料は河上丈太郎先生の記述について欠くことの出来ない資料であった。そこでこれらの資料に急いで目を通して若干書き加えた。

① 河上丈太郎『私の履歴書』日本経済新聞社，昭和36年８月
②『河上丈太郎演説集』昭和41年４月
③『河上丈太郎 十字架委員長の人と生涯』昭和41年12月
④ 河上民雄『現代政治家の条件』春秋社 1968年２月
⑤ 河上民雄『政治と人間像』人間の科学社 1975年11月
⑥ 河上民雄「社会主義に未来はあるか」1982年１月 「千日千歩」1985年３月
⑦ 河上民雄後援会編「いまの日本の政治の問題点」1984年３月 「講演集 折々の思い」1988年１月

3）『文学部回顧』34頁

4）『関西学院60年史』251—252頁

このように河上先生は高田博士が新進の社会学者として学界に花々しく登場したまさにその時，関西学院に講義をお願いしたわけである。『文学部回顧』の最初に高田博士を当時の社会学科生が囲んでいる写真が収められているが，先生は中央に巖の如く鎮座しており威風あたりを払うの観がある。

さてこの偉大な学究を迎え学生達は狂喜したが，高田先生の深遠な学理をどの程度まで理解したかということになると，いささか疑問が残りそうだ。『文学部回顧』には「高田保馬教授の来任が皆を喜ばしたという事は前に書いたが，さて講義となると，とても速い。目をつぶってのべつ幕なしに言ひまくり，ノートを取るのに相当骨が折れたらしい。」[1]と記されている。翌大正9年に高田先生の講義を聞かれた山本利寿先生は「高田先生の講義は毎週，何曜日に来るというわけにはいかないので，集中講義になりました。高田先生が来られる時は他の講義は休講で，朝からずっと続けて講義を聴きました。『社会学原理』（大正8年）は厚い本でした。その本を参考書のようにして読んだのです。」[2]と話されている。

高田保馬博士を迎えた河上先生は好機を捉え，公開講演会も試みた。この時の事情を河上先生は「高田氏が来院せられたので神戸の青年会館で社会科の特別校外講演会を催しました。高田氏は『社会進化について』と題し，私は『ギリシャの政治』と題し講演をしました。こんな催は当時神戸では珍らしかったので，神戸高商の多数の学生も来聴し素晴しい盛況でありました。これも学院が商業教育以外に mission shool としての意義と存在とを明確にし，学院としての対外的権威を高める一助になったことと思いました。」[3]と書かれている。

欲求不満が爆発しそうな状況に高田保馬先生が来られて講義されただけでなく，特別講演会なども催され，関西学院社会学科の評価を高めることに成ったわけである。高田先生は大正10年3月新明正道教授が就任するまでの中継ぎの役を果たしてくれた。

要するに関西学院で日本人として最初の講義を担当して下さったのが高田保馬先生であったことをわれわれ関西学院大学社会学部に連なる者は忘れてならないであろう。

〔5〕新明正道教授と社会学

河上教授は高田先生の集中講義（大正8年，9年）の他にも社会学科にとっていくつかの重要なイベントを実施している。これを略記すると，第一は高野山大学との「交換講演会」（大正10年）を行なったこと，第二は宗教部の伝導旅行を発展させ全学院の事業として「文化講演」（大正10年）を始めたこと，第三に大阪市中之島の中央公会堂で「大平洋問題講演会」を開催している。

社会学科の充実に伴ない高等学部の中に併置されて来た文科と商科は独立して「文学部」と「高等商業学部」となった。大正10年のことである。初代の文学部長にはウッズワース氏が就任した。

このように文学部や社会学科が発展の機運に乗った大正10年4月に東大出身の新明正道教授が着任した。河上丈太郎先生はこのことを「殊に同年社会科としては新明正道君を教授として迎えたことは特筆すべきことであります。同君は学生時代に既に多くの著述もあり当時学生界の思想的最高の水準にあった人であります。この人が吉野作造博士の紹介で学院に来られ，高田氏に代って社会学の講義をせられ社会科の基礎を強固にせられました」[4] と述べている。

（1）関西学院における活動

1）新明先生と社会学

ところで新明先生御自身はどのような気持ちであったかについてみると「それにもかかわらずあえて私がご依頼を承諾して今日のようにこちらへ参ることにしましたのは，もはや半世紀を越えた昔のことになりますが，私が大学を卒業して最初に教鞭をとるようになったのが当時神戸市の東端にあった当学部の前身の関学文学部社会学科で

1）『文学部回顧』40頁
2）山本利寿先生談「飛雲悠々（上）」関西学院『クレセント』23号 昭和62年12月　113頁
3）『関西学院60年史』252頁
4）　　同上書　253頁

あって，しかも私が最初に社会学の研究を始めたのもそこであり，私にとりまして当学部が二重の意味でかねてから学問的な故郷のイメージを与えていたからであります。

私は大正7年東大法学部に入学してから政治学科に在籍し，一応3年間は政治学の研究をいたしました。したがいまして，卒業後私が教師として関学に招かれたときは当初はただ政治学の講義を担当するだけの約束になっておりました。ところが，いざ就職が決まってしまうと，学校当局から政治学とあわせて社会学の講義も受持ってほしいという注文が出て来まして，これにはいささか閉口しました。(中略) しかしそれでも大学では新人会の運動に関係していたせいで多少社会問題の書物を読んでいましたので，激励してくれる友人もあり，やってやれないことはないと思って社会学の講義を引受けることにしたが，政治学はともかく，社会学については皆目無知同然の有様でしたから，関学に来てからは自分の勉強時間の大半を社会学の研究にあてて手当たり次第内外の社会学書を買い求め，これを読みおわるとすぐ一夜漬の知識を学生諸君の前に吐き出し，少なくとも社会学に関するかぎり一面教師であると同時に反面また学生であるような生活をしばらくの間反復していたものでした。当時どんな内容の講義をやっていたものか，今から思うと冷汗の出る思いがいたしますが，こうした苦労もあっただけそのころの思い出にはひとしお感慨の深いものがあることは事実でして，そのなつかしさも手伝ってついこのようにこちらにまいりまして講演するようなことになってしまった次第であります。」[1]と述懐されている。

2）学生達の受けとめ方

次に学生達には新明先生がどのように映ったであろうか。『文学部回顧』は「中々の好男子で人気たちまち湧くが如し。但し学校出たてとあって教壇に立つとテレた事も確か。初めの中は講義する時の手の置き場に困り，ボタンをはずしてはめ，はめてははずしてゐるといふ。」[2]とユーモラスに述べている。

翌年6月22日には学生の社会学会が発足したが，つづいて講演会が催された。その状況を『文学部回顧』は「当時新人会出のチャキチャキで学院に来たての新明正道教授の斡旋よろしくあって，長谷川如是閑氏と大山郁夫氏という社会学の方面では当時有名だった両大家が来たといふんだから神戸のインテリゲンチャの聴きに来るのも無理からぬ話。新明教授の開会の辞に次いで長谷川如是閑氏の題は不明だが，大山郁夫氏は＜階級意識と社会意識＞という演題の下に四時間に亘る大講演であった。」[3]と述べ，さらに「なにしろ当時はようやく普選運動も熾烈となりつつあった時代であるし，神戸の無産運動も1920年の川崎ストライキが成功してから，漸く目覚めつつあった時。殊にそうした運動の理論的方面に至って無智な時代であった時に際し，河上氏が居り，今又新明氏が来られたというだけでも大いなる刺激であるのにその上当時鳴らしていた大山氏や長谷川氏等が来神という事は前古未曽有の事だったに違いない。」[4]と述懐している。

3）エピソード

新明先生が学生と親しく交わり，学生を魅了していたと思えるエピソードが『文学部回顧』にみられる。「赤いシャツを着て和服の襟からチラと覗かした処が人の目を引いた。文章がうまくて初期に於いては『社会学序説』の著書があるが，発禁を喰った。がこれを読んで感激した学生は多かったとの事である。そこでこの『社会学序説』にまつわる少し手痛いエピソードを紹介することにする。当時ハミル館の附近に松寿幼稚園があって，ここで新明氏の奥様が保母をしてゐられた。処がこのマダムさすが新人の細君であるだけに断然たるシック。シックというよりも派手な事おびただしかった。で『社会学序説』とこの事との関係だが『序説』の中にこんな意味の文があったのだ。つまり『女が美しく装ふのは男の目を引くた

1）新明正道「日本社会学の展開」『社会学部設立20周年記念論文集』関西学院大学社会学部　昭和55年3月　14～15頁
2）『文学部回顧』59頁
3）　同上書　42頁
4）　〃　43頁

めである。それはとりもなほさずその心理たるや売淫的心理であり派出に過ぐる装はそれ自身売淫的行為を形成する』と言うんだからさあ文句の云いたい連中は見逃しておかない。新明教授を捕へてさんざん油をしぼったという事である。」[1]これによっても先生がいかに学生に慕われていたかがよく知られる。

4）短歌会——「傾斜地」

新明先生は文芸の才があり戯曲を作り同人雑誌『我等』に投稿したりしており，また和歌にすぐれていたが，関西学院でも1924～1926年の間，松沢兼人教授と共に奥様や学生を交えて短歌会「傾斜地」を主宰された。それぞれの作品に無記名で点数をつけて批評し合ったという。その中で点数の高かった15首が『文学部回顧』にのっているが，新明先生の一首をあげておこう[2]。

「葺の間に葭切がなく鋭さを
　　包んで暮れる潟の夕影」

5）思想調査と京大学連事件

学生時代から新人会で活動していた新明先生は刑事の監視を受けていたようである。それは関西学院へ着任した日から知られた。『文学部回顧』によれば「なにしろ当時東京帝大の新人会の中でもパリパリで正しく当時の尖端を切っていた新人中の新人，それが学院に来られるという事になったんだから大したもの。勿論大学出たての若輩だった事も確かだが，それにしてもまず目をつけたのは警察のおぢさん。或日警官を派してとある雨の中ハミル舘へさぐりを入れに来さしめたとある。めったに入って来た事のない制服巡査が突然ハミル舘に入って来た。出会ひ頭に階上から下りて来たのが新宮君だった。いかな同君とも若干目をパチクリしたであろう。……で巡査はまづ任務を果す段取りとなった。『新明という先生はもう来たか』『そんなものは知らん。それを聞いてどうする』とそこは向う意気の強い新宮君，あべこべに逆襲，こいつあ一寸見当が違うと見てとったのか，巡査君『いや上官からの命令で聞きに来たゞけだ』と言って帰って行った。新宮君は知らぬといったが当時新明先生は着任していた。」[3]とある。

そして大正14年（1925年）の12月には京大学連事件のあほりを喰って新明先生も家宅捜索を受けている。『文学部回顧』には「学生運動は愈々その最高頂に達して来つつあった。京大事件にからんで京大の河上肇教授なんか家宅捜索を受けたといふニュースが飛べば人心騒然。なにしろ学院生も二人迄もこれに連坐したとあっていよいよ睨まれて来るわけ。遂に時は来た。学院教授，学生の家宅捜索は行はれたのである。河上，新明，松澤，田村という教授連を始め学生では谷水，小崎，酒井，蓬臺（神戸高商生）といった連中はすべてこの時にやられた人々である。」[4]と記されている。

（2）新明教授の社会学研究

1）関西学院在任中の著作

先に述べたように新明先生は政治学を教えるべく就任したところ，併せて社会学も教えるように懇請されたので関西学院に来て初めて教えるために社会学を勉強し始めたのである。

先生は関学に着任して5ケ月後の9月に『ソフィストの政治学的研究』を出版されているが，これは就任前の仕事と考えられるから，これを別にすれば大正10年4月から15年3月までの間に『社会学序説』（大正11年11月）と『権力と社会』（大正13年6月）の二冊を上梓されている。

この外に論文を学術雑誌に16編，一般の總合雑誌等に15編合計31編発表されている。

わずか5年間にこれだけ活発な著作活動をしていたとは実に驚くべきことであるが，さらに新らしく始めた社会学についても猛烈な勉強を続け，次第に著作活動態勢が整って来つつあることが知られる。これらの研究の成果は東北大学に移ったあと昭和3年に大著『形式社会学論』となって現れた。

新明先生にとって関西学院における社会学の研究はまさに大成の為の準備期間をなしている。学術雑誌16編の中には高等商業学部の専問雑誌『商光』の3編が含まれている。それは，

①「サムナー社会学に現われた政治思想」（大正

1）『文学部回顧』97頁
2）　同上書　99頁
3）　〃　58～59頁
4）　〃　93頁

11年11月）

②「社会意識論」（大正14年9月）

③「歴史哲学としての社会学」（大正15年3月）

であるが、これによっても社会学の研究が大きく進展していることがうかがわれる。

2）この時期の新明先生の研究の位置づけ

大道安次郎教授はこの時期の新明教授の社会学について『新明社会学』（昭和49年）の中で関学時代をさらに二つに分け，はじめのころは政治学的な社会学，後半は本格的な研究にふみ出し，形式社会学に傾斜していたと指摘している。すなわち「関西学院時代は大正10年から大正15年までであるが，はじめは社会学の講義の内容も政治学とかかわりの多いグンプロヴィッツやラッツエンホーファーなどの「社会学派」的なものであり，また学院に赴任した翌年（大正11年11月）出版された『社会学序説』に展開されたものなどが主たる内容であったと思われる。だから政治学的な社会学であったといえよう。『社会学序説』では，社会が労働を中心とする生活と享楽を中心とした生活の二つの階級にわかれ，労働と搾取との「奇怪なる分業」が成立し，国家は特定の階級に奉仕しているとなし，国家の変革を殲滅せんとする「直接行動」の必要を主張している。同書で，マルクス主義の階級斗争史観やグムプロヴィッツなどの集団斗争史観，さらにアナーキズムの国家否定論などに触れているし，さらにまたコールやマッキーヴァーなどの多元的国家論者の著書にも親しんでいる」[1]と述べ，そこで「このように見てくると，関西学院教授時代のはじめの頃は，実践的意欲に満ちた政治学的社会学の色彩が濃かったといえる」[2]と述べている。

大道教授はしかしその中にもすでに綜合社会学的志向があったとして，次のように述べている。「ただここで後の新明社会学の展開との関連で注目しておきたいことは，社会学を狭い枠の中に閉じこめずに，政治学的な社会学の性格を持っていたということ，明確な形ではなかったとしても綜合社会学への志向があったということである。」[3]

ところが後半に成ると社会学理論の本格的な研究が始まった。大道教授はこれについて「私は当時関西学院の高商部の学生であった。確か二年生のとき博士から社会学の講義を受けた。大正13年から14年にわたってのことであった。当時のノートは現在手許にないので正確な文章は引用できないが，ジンメル，フィアカント，フォン・ウィーゼなどの形式社会学やテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』や高田保馬博士の『社会学概論』などを紹介されたことはいまもなお脳裡に深く残っている。」[4]　そこで「このように見てくると，前史の後期の関西学院時代とくに後期の後半ではすでに本格的な社会学の研究に踏み出しており，しかも綜合社会学ならぬ形式社会学に傾斜している節がうかがわれる。」[5]のである。

3）新明先生の回想

新明先生御自身もこの間の事情を昭和53年1月，著作集第一巻の序言で次のように述べている。まず社会学の研究をはじめた事情について「私が社会学の研究をやり出したのは関西学院で教職につくと同時に政治学のほかに社会学の講義を担当しなければならなくなったからであって，その必要のため私は関西学院時代の当初は新たに内外の社会学書を買い求めてにわか勉強を始めた」[6]と述べている。

次に『社会学序説』の内容については「まともには，すぐにオーソドックスの社会学の講義はできず，したがって本書（『社会学序説』）では学生時代に読んだマルクス主義やギルド社会主義などの社会思想を中心として，多少社会学的なものとしてはグンプロヴィッチ，ラッツェンホーファやオッペンハイマーの著作を参照した程度であって，コントやスペンサー，それにマッキーヴァーやラスキの見解も引用されているにせよ，全体として本書は「社会学」というよりも「政治社会学」と銘を打ってよいものになっている。おのずから本書の論旨はきわめて単純かつ明瞭であるが，そ

1）大道安次郎『新明社会学』恒星社厚生閣　昭和49年　22頁
2）　同上書　22頁
3）　〃　22—23頁
4）　〃　24頁
5）　〃　24頁
6）『新明正道著作集第一巻』誠信書房，昭和51年　序言 ii

れだけ措辞的にはラジカルな印象を与える点が多く，そのせいもあってかこれは出版して幾月も経ないうちに発禁処分に付せられている。」[1]と述べている。

この序言のなかで新明先生はさきにふれた神戸市における講演会についてもふれている。すなわち「したがって『社会学序説』を書いた頃の私は，西洋の学者としてはグンプロヴィッチ，ラッツェンホーファー，マキーヴァー，ラスキ等を中心として社会学の研究を進めており，その中でも特に強い感化を受けたのはグンプロヴィッチやラッツェンホーファーからであるが，いまにして思うと，これも実は私の大学生時代からの雑誌『我等』（後に『批判』）で時流的批判の筆をふるっていた長谷川萬次郎氏や大山郁夫氏等を経ての間接的な影響によるとみてよいものがある。両氏とは東京大学で新人会の関係で接触があり，関西学院に来てからも社会思想社（第一期新人会の後身）主催で両氏を神戸と大阪に迎えて講演会を開いたほか，両氏の編集していた『我等』には随時論文を送って掲載してもらっていたものである。」[2]と述べている。

（1）新明教授と高田博士

さらに高田保馬博士との関係にもふれて「しかし私は一応このような心情をもって『社会学序説』を書き上げたものの，その出版された年には高田保馬博士の『社会学概論』が出版されている。私がこれを読んだのはその翌春のことであって，これが私の本格的に日本の社会学書を読んだ最初のものであるが，その頃になると，ドイツでもフィアカントの『社会学』（1923年），フォンウィーゼの著作が舶来するにつれて，いきおい私も一時形式社会学の系統の社会学研究に没頭することになり，この間ジンメルの著作，特にその社会学関係以外のものも読みあさって，彼の特有な哲学的発想には少なからぬ魅力をさえ感じさせられたものである。私は1925年関西学院高等商業部の雑誌『商光』に社会意識についてという一文を寄せたが，雑誌ができてから間もなく，当時京都におられた高田博士からの論文を拝見したいという内容の葉書が到着した。これには私自身いささか驚いたが，これによって刺激を受けたことは事実であって，私はこの年の終りに「行為における社会の形式性」と「社会関係論について」という二つの論文を発表している。このなかの後の論文については高田博士からお手紙があり，その内容について感服したというおほめの言葉を頂戴した。私はその時までまだ博士には会っていなかったが，高名な博士からこのような激励のお言葉を得て，私が多少の自信をもつようになると同時に，かつてオッペンハイマーが試みたように，一時形式社会学の関係分析を積極的に取り入れて私の社会学の一般理論的な構造を練りあげようとしたことは事実である。」[3]と述べている。

これらを綜合すると，新明教授は，第一に政治学を教えるために関西学院に就任したにもかかわらず，社会学も担当することを要請されたため社会学を研究し始めたものであり，言はば関西学院が新明先生を社会学者に仕向けたということに成ろう。

第二に，関西学院における新明先生の社会学研究は初期と後期とではその性格が変化している。初期には政治学に近い「政治学的社会学」であり，これは当時論壇の花形であった長谷川萬次郎氏や大山郁夫氏などの影響が大きかった。

第三に，後期に成ると本格的な研究がすすみ，当時，大きな潮流となって来た形式社会学を学び，高田保馬先生の影響も強く受けている。新明先生は関西学院において形式社会学を研究し後に『形式社会学』を出版された。

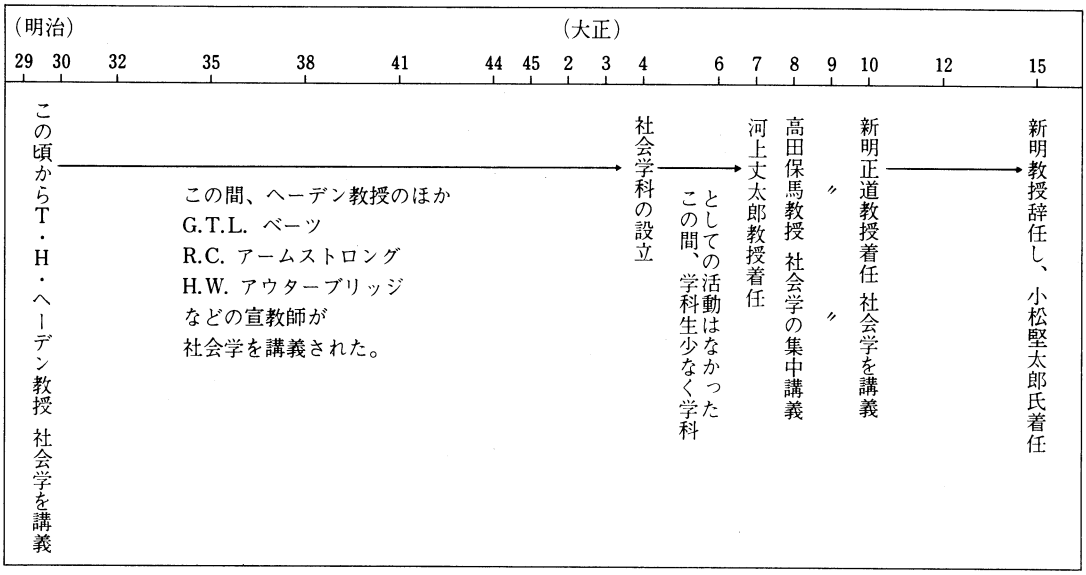
むすび

これまで述べて来たことを最後に要約しておこう。

第一に，明治30年代から関西学院においては社会学が講義されていた。担当者は後，永く神学部長をされたヘーデン教授である。専門学校としての神学校と高等科（高等部）で社会学が教えられていた。ヘーデン教授はコロンビア大学のギデン

1）『新明正道著作集第一巻』誠信書房　昭和51年　序言ii
2）　　同上書　昭和53年3月　序言ii
3）　　〃　　序言 iii iv

関西学院における社会学の歩み



グスの『社会学原理』（The Principles of Sociology）の原書を用いて講義をされている。関西学院の社会学が神学部の教授によって始められ育てられたという事実は銘記さるべきことであろう。

第二に，大正時代に入ると講義担当者はベーツ，アームストロング，アウター・ブリッジ先生となっている。いずれもマスター・オブ・アーツの称号を持った宣教師の教授であった。

第三に，大正4年に小山東助教授によって文科に「社会学科」が創られた。そのねらいはミッション・スクールとしてソーシャル・ワーカーを世に送り出すこと，また狭く政治学や経済学や法律学に限定せず広く社会の全体理論の把握を目指した学科であったということは今日からみて敬服すべき識見といえよう。

第四に，社会学科は発足したものの数年間は学生はなく，またあっても人数があまりにも少ないため放置されていたが大正7年に河上丈太郎先生が就任してから学生も急増（時代的要請があった為であるが）し，河上先生の情熱を傾倒した指導によって学科としての基礎が固まった。

第五に，日本人の社会学者として本格的に社会学を講義したのは大正8年に『社会学原理』を著わした高田保馬先生であった。高田先生の大正8年，9年にわたる講義によって社会学の魂が吹き込まれたわけである。

第六に，日本人の専任教授として社会学を最初に講義したのは新明正道先生であった。先生は政治学を教えるために就任したが関西学院の要請で社会学も教えることに成り，初め政治学的社会学を講じたがやがて形式社会学を本格的に研究するように成った。

第七に，新明教授は形式社会学を本格的に研究する過程で高田保馬先生と親交をもつようになっていた。高等商業学部の学生時代に新明先生に可愛がられた大道安次郎氏は卒業後，九州大学の高田博士のもとに進学し社会学を修めた後，昭和5年から母校の教壇に立ち停年まで42年間奉職されたが，生涯を通して新明先生との美しい交友関係をもたれた。

新明先生は大正5年3月に関西学院を辞して東北大学の社会学の助教授となったが，その後任には九州大学で高田保馬先生の助手をしていた小松堅太郎先生が就任することに成る。これについては本稿の続編において取扱うことに成る。

このようにみると関西学院の社会学の基礎は高田保馬，新明正道という大正・昭和を通しての二人の巨匠によって培かわれていることがわかる。

付記

本稿をまとめるあたり，河上丈太郎先生に関する貴重な資料を提供していただいた衆議院議員の河上民雄先生に心から謝意を表したい。